《論　説》

途上国のオリンピック参加とその特徴：ロンドンオリンピックを事例として

金田　英子

はじめに

スポーツの祭典といわれているオリンピックは、1896年にギリシャで開催されて以来、２回の中止を含め、ヨーロッパ大陸で19回、アジア大陸で４回、オセアニア大陸で２回、アメリカ大陸で６回が実施されている[1)]。2012年に開催されたロンドンオリンピックは史上最多を記録し、204の国・地域から１万人を超える選手が参加した[2)]。今や、オリンピックブランドは、平均で94％の認知度を誇る、世界で最もよく知られたブランドの１つとなっている[3)]。

オリンピズムの根本原則では、「このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。」と謳っている[4)]。この歴史と規模から、その目的を十分に達成しているように見える。しかしながら、途上国[5)]のオリンピック参加がどのような状況にあるかの考察はなされたことがない。

ロンドンオリンピックで実施された26競技302種目の中で、予選からの参加競技者数が最多だったのは、個人競技では陸上競技（男子：1, 160人 、女子：1, 071人）であった。中でも、100m は、男子61ヵ国・地域から75名、女子64カ国・地域から81名の参加があった。また、団体競技ではサッカー（男子162

チーム、女子68チーム）であった[6)]。

そこで本稿では、オリンピック競技種目の中から、とくに陸上競技100mとサッカーに着目し、途上国からの選手の競技参加状況について考察をすることにした。

選手の選出方法

まず、本稿で対象とするそれぞれの種目について、ロンドンオリンピックでの選手選出方法を整理する。

1）陸上競技100mの選手選出方法[7)]

ロンドン大会ではオリンピックとしては初めて、男女100m競走で予備予選が実施された。オリンピックの陸上競技100mでは、参加標準記録が設定されている。1ヵ国・地域につき、参加標準記録A（男子10.18秒、女子11.29秒）を突破した選手は最大4名までエントリー可能で、そのうち3名が出場できる。参加標準記録B（男子10.24秒、女子11.38秒）を突破した選手は同2名をエントリー可能、うち1名が出場できる。例外として、国内オリンピック委員会（NOC: National Olympic Committee）が存在し、すべての種目に標準記録の突破者がいない場合、男子10種競技、女子7種競技、各種リレーを除く、いずれかの種目へ男女1名ずつの参加が認められている。したがって、この枠で参加する選手は、多くが100mにエントリーをする。ロンドンオリンピック以前は、1次予選、2次予選、準決勝、決勝と4回のラウンドが設定されていたが、100m、200mおよびリレーに登録をしている選手は、100mで4回、200mで3回、リレーで2回と計9回走ることになるため、オリンピックと世界陸上でのラウンド数は最大3回までとすることを国際陸上競技連盟（IAAF: International Association of Athletics Federations）は決定し、2011年世界陸上選手権大会から、標準記録を突破していない選手のみを対象とした予備予選を導入している。ロンドンオリンピックでは、8レーンのトラックを使用したので、予備予選では、標準記録を突破していなかった、男子29名が10枠を、女子33名が8

枠を競うこととなった。

２）サッカーの選手選出方法[8)]

オリンピックの運動には、オリンピック運動を統制しつつリードしていく国際オリンピック委員会（IOC: International Olympic Committee）、それぞれのスポーツを統制する国際競技連盟（IF: International Federation）、そしてNOCがある[9)]。サッカーの場合は、国際サッカー連盟（FIFA：Fédération Internationale de Football Association）に属している各大陸連盟が予選形式を決定し、FIFAの承認を得た上で実施する。ただしオリンピック出場は、国内サッカー協会単位ではなく国内オリンピック委員会単位となる。したがって、たとえば欧州サッカー連盟に登録している、イングランド、ウエールズ、スコットランド、北アイルランドの各チームは、オリンピックでは、イギリス代表として出場する。また、オリンピックが行われる前年の12月31日時点で23歳未満の選手に出場権を与えるといった年齢制限を設けており、この規定によってオーバーエイジとなった選手を入れ替えることが認められている。

ロンドンオリンピックでは、予選を勝ち抜いてきた男子16チームをA･B･C･Dの４組に分け、各組で総当たり戦を実施し、各組上位２チームの８チームで決勝トーナメントを行って最終順位を決定している。また、女子は12チームをE・F・Gの３組に分け、各組で総当たり戦を実施し、各組上位２チームと、各組３位チームのうち成績上位の２チーム（勝ち点、得失点差、総得点の順に評価）の計８チームで決勝トーナメントを実施し最終順位を決定している。男女とも、開会式前に競技が開始されており、期間中には決勝戦しか行われなかった。

大陸連盟は、欧州サッカー連盟（UEFA：Union of European Football Associations）、アジアサッカー連盟、（AFC：Asian Football Confederation）、アフリカサッカー連盟（CAF：Confederation of African Football）、北中米カリブ海サッカー連盟（CONCACAF：Confederation of North, Central American and Caribbean Association Football）、南米サッカー連盟（CONMEBOL：Confederación Sudamericana de Fútbol）、そして　オセアニアサッカー連盟（OFC：Oceania Football

Confederation）の6大陸にグループ分けされていて、オリンピック出場枠は開催国とチーム数により順に、男子3、3.5、3.5、2、2、1ヵ国・地域であったが、結果として3、3、4、2、2、1カ国・地域、女子、2、2、2、2、2、1ヵ国・地域となった。

前述したとおり、オリンピックのサッカー競技には、どの国の場合でも出場選手の年齢制限を23歳未満にするという規定がある。FIFAが年齢制限のないオープントーナメントに同意をしない理由は、オリンピック代表チームには一流選手を出場させない国が多いことと、ヨーロッパ、アフリカ、南米で、それぞれの大陸選手権の予選が行われる時期と、オリンピックの予選が行われる時期が重なるため、その両大会にベストメンバーをそろえるのが難しいことにある[10)]。それゆえに、男子の場合、UEFAは「UEFA U-21欧州選手権2011」、AFCは「アジア予選」、CAFは「アフリカ U-23選手権2011」、CONCACAFは「北中米カリブ海予選」、CONMEBOLは「南米ユース選手権」、OFCは「オセアニア予選」を、女子の場合、UEFAはUEFA所属のチームを「2011 FIFA女子ワールドカップ」の結果で順位付けした上位チーム、AFCは「アジア予選」、CAFは「アフリカ予選」、CONCACAFは「北中米カリブ海予選」、CONMEBOLは「2010スダメリカーノ・フェメニーノ」、OFCは「オセアニア予選」を、それぞれロンドンオリンピックの予選大会に位置づけた。

データ分析の方法

途上国の定義には、とくに定まったものはない。そこで世界銀行経済グループ分類（2006）[11)]に基づき、人口が3万人以上の国・地域の経済を1人あたりの国民総所得に分類する。グループは、低所得群、中所得の下位中所得群、上位中所得群、高所得群の経済協力開発機構（OECD：Organisation for Economic Co-operation and Development）加盟、非加盟の5領域に区分されるが、ここではOECD加盟と非加盟の区分をなくし、高所得群として一括する。したがって、4領域とする。このうち、いわゆる先進国と呼ばれる国・地域は高所得群を、途上国とよばれる国・地域は低所得群と低位中所得群を示す。

本稿では、まずオリンピック全体での途上国の位置づけについて概観する。次に、種目ごとの特徴につにいて吟味する。陸上競技については、参加選手数が最多の100m男女を対象とする。男女別に、予備予選、予選、準決勝、決勝と、参加国の推移を追い、経済区分による出場国・地域と競技結果について考察する。サッカーについては、予選大会のデータをもとに、経済区分による大陸別出場チーム数を整理・分析する。あわせてオリンピックでの最終競技結果についても検討する。

結果

所得群ごとのオリンピックへの参加状況は、表１－１のとおりである。低所得群と中所得群を合わせた途上国は113ヵ国・地域、先進国は48ヵ国・地域と圧倒的に途上国からの参加が多い。また参加競技者数で見ても、途上国が全体の55％、先進国が24％と倍以上の参加となっている。ところが、表１－２に示すよう、金・銀・銅のメタル獲得率を見ると、途上国が30％であるのに対し、

表１－１　経済区分によるロンドンオリンピックへの参加状況

	OECD 分類	参加	不参加	人数	参加率（％）
低・下中	114	113	1	3, 374	55
上中	40	38	2	2, 046	19
高	56	48	8	5, 295	24
群外	5	5	0	18	2
計	215	204	11	10, 733	100

表１－２　経済区分によるロンドンオリンピックの獲得メダル数

	参加	メダル国	メダル数	獲得率％
低・下中	113	34	291	30
上中	38	19	170	50
高	48	32	500	67
群外	5	0	0	0
計	204	85	—	—

表２　経済区分による陸上競技（100m）のロンドンオリンピック出場国と結果

	低所得	下位中所得	上位中所得	高所得	分類対象外	
国数	59	54	38	48	5	204
男子						
未出場	43	39	24	35	2	143
予備予選	アフガニスタン バングラデシュ ブルキナファソ(※) 中央アフリカ(※) コンゴ(※) ギニアビサウ(※) ラオス ネパール パキスタン ソロモン諸島 サントメ・プリンシペ	ボリビア(※) ミクロネシア インドネシア(※) キリバス モルディブ(※) マーシャル諸島 スリナム(※) トンガ	米領サモア ガボン モーリシャス(※) パラオ セントビンセント・グレナディーン	マルタ シンガポール(※)	クック諸島 イギリス領ヴァージン諸島 ツバル	
計	11	8	5	2	3	29
予選	カメルーン ガンビア ギニアビサウ(※) コートジボワール コンゴ(※) ザンビア ナイジェリア［3］ ブルキナファソ(※) 中央アフリカ(※)	イラン インドネシア(※) エジプト ガイアナ コロンビア ジャマイカ［3］ スリナム(※) ブラジル ボリビア(※) モルディブ(※) 中国	アンティグア・バーブーダ エストニア オマーン グレナダ セントクリストファー・ネービス［3］ トリニダード・トバゴ［3］ バルバドス ポーランド モーリシャス(※) リトアニア	オランダ カナダ ケイマン諸島 シンガポール(※) スペイン ノルウェー バハマ［2］ プエルトリコ フランス 英国［3］ 日本［2］ 米国［3］		
計	11	13	14	18	0	56
準決勝	ガンビア コートジボワール ザンビア	ジャマイカ［3］ 中国	アンティグア・バーブーダ セントクリストファー・ネービス トリニダード・トバゴ［3］	オランダ カナダ ケイマン諸島 バハマ フランス 英国［3］ 日本 米国［3］		
	3	4	5	12	0	24
決勝		ジャマイカ［3］（1・2）	トリニダード・トバゴ	オランダ 米国［3］(3)		
計	0	3	1	4	0	8

先進国は67％と途上国の倍以上になっている。

次に、種目別についてである。

陸上競技男子100m（表２）では、標準記録を突破していない選手のみを対象とした予備予選に29ヵ国から参加している。その中で途上国からは19ヵ国であった。出場国は61ヵ国で、参加国の48％が予備予選の対象となった。予選に

女子						
未出場	41	38	27	33	1	140
予備予選	アフガニスタン イエメン カメルーン(※) ガンビア(※) ギニア コモロ(※) コンゴ(※) ザンビア ソロモン諸島 トーゴ(※) ニジェール ネパール パプアニューギニア(※) ラオス	イラク(※) カーボベルデ キリバス トルクメニスタン バヌアツ ミクロネシア モルディブ ヨルダン	オマーン パラオ ベリーズ(※) リビア	アンドラ カタール サンマリノ マルタ(※) 香港(※)	クック諸島 ツバル	
計	14	8	4	5	2	33
予選	ウズベキスタン カメルーン(※) ガンビア(※) コートジボワール コモロ(※) コンゴ(※) トーゴ(※) ナイジェリア［3］ パプアニューギニア(※) リベリア	イラク(※) ウクライナ［2］ カザフスタン コロンビア ジャマイカ［3］ ブラジル ブルガリア ベラルーシ ルーマニア 中国	ガボン チェコ トリニダード・トバゴ［3］ トルコ ベリーズ(※) ポーランド リトアニア ロシア	オーストラリア カナダ ドイツ［3］ ノルウェー バハマ［2］ フランス［2］ マルタ(※) 英国［2］ 香港(※) 日本 米国［3］ 米領バージン諸島［2］	イギリス領ヴァージン諸島	
計	12	13	10	20	1	56
準決勝	コートジボワール ナイジェリア［2］	ウクライナ カザフスタン ジャマイカ［3］ ブラジル ブルガリア	ガボン トリニダード・トバゴ［3］ リトアニア	ドイツ ノルウェー バハマ フランス 英国 米国［3］ 米領バージン諸島		
	3	7	5	9	0	24
決勝	コートジボワール ナイジェリア	ジャマイカ［2］ （1・3）	トリニダード・トバゴ	米国［3］（2）		
計	2	1	2	3	0	8

－ ※は、予備予選通過選手の国
－［　］は、１カ国における出場選手数
－ 決勝での（　）内の数字は、最終順位を表す。

出場した10名は、いずれも予選敗退をしている。準決勝への出場者24名のうち、12名は先進国の選手であった。決勝には、ジャマイカとアメリカから各３名が進出し、金・銀をジャマイカが、銅をアメリカが制した。

陸上競技女子100m（表２）でも、標準記録を突破していない選手のみを対象とした予備予選に33か国・地域が参加をし、参加国の52％を占めている。予

表３－１　経済区分によるの大陸連盟別出場チーム数（ロンドンオリンピック・サッカー競技予選）

	欧州サッカー連盟		アジアサッカー連盟		アフリカサッカー連盟	
男子　出場枠	4		3		4	
	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム
低所得	1	1	10	17	21	37
下位中所得	13	13	11	12	6	8
上位中所得	10	10	3	3	5	7
高所得	24	24	11	13	0	0
分類対象外	5	6	0	2	0	4
計	53	54	35	47	32	56
女子　出場枠	3		3		2	
	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム
低所得	0	1	6	11	9	37
下位中所得	0	13	5	9	4	9
上位中所得	0	10	0	2	3	7
高所得	4	25	6	9	0	0
分類対象外	1	1	0	0	0	3
計	5	50	17	31	16	56

	北中米カリブ海サッカー連盟		南米サッカー連盟		オセアニアサッカー連盟	
男子　出場枠	2		2		1	
	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム
低所得	2	2	0	0	2	2
下位中所得	8	8	6	6	5	5
上位中所得	9	12	4	4	1	1
高所得	4	8	0	0	1	1
分類対象外	0	11	0	0	0	5
計	23	41	10	10	9	14
女子　出場枠	2		2		1	
	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム	参加チーム	加盟チーム
低所得	2	2	0	0	1	2
下位中所得	6	8	6	6	3	5
上位中所得	3	12	4	4	0	1
高所得	4	8	0	0	1	1
分類対象外	0	11	0	0	0	5
計	15	41	10	10	5	14

選に出場した８名は、男子同様、いずれも予選敗退をしている。女子の場合は、準決勝への出場者24名のうち、９名が先進国、10名が途上国と大差は見られなかった。また決勝でも経済区分による偏りは見られなかったが、実際にはジャマイカが金・銅、アメリカが銀と、男子同様、ジャマイカとアメリカとの競争となった。

表３－２　経済分類によるサッカー競技のロンドンオリンピック出場国と結果

	低所得	下位中所得	上位中所得	高所得
男子		ブラジル（２） ベラルーシ ホンジュラス モロッコ	ガボン メキシコ（１）	イギリス スイス スペイン ニュージーランド 韓国（３） 日本
女子	低所得	下位中所得	上位中所得	高所得
	カメルーン 北朝鮮	コロンビア	南アフリカ共和国	アメリカ合衆国（１） イギリス カナダ（３） スウェーデン 日本（２） ニュージーランド フランス

-（　）内は、最終順位

サッカー競技男子（表３－１）では、162チームが予選の対象となっている。大陸により傾向が大きく異なっている。前述したよう、オリンピック参加を全体でみると、途上国からの参加が、先進国からの参加の倍以上であるが、欧州サッカー連盟では、先進国が24チーム、途上国が14チームと、先進国からの参加が多い。さらに、各連盟からの出場枠があらかじめ決められているため、南米サッカー連盟のように、先進国が存在しない地域でも、オリンピックへの出場が可能となっている。しかしながら、オリンピック大会での参加は、16チーム中、６チームが開発国、４チームが途上国からの参加だったが、低所得国からの出場は見られなかった。結果は、金・銀・銅の順に、メキシコ、ブラジル、韓国となっている（表３－２）。

サッカー競技女子（表３－１）では、68チームが予選の対象となっている。男子に比べ、女子の場合は、欧州サッカー連盟からの参加チームが５チームと、圧倒的に少ない。さらに、男子同様、各連盟からの出場枠があらかじめ決められているため、南米やオセアニアからの参加も見られる。オリンピック大

会での参加は、12チーム中、半分の７チームが先進国からの参加で、結果も金・銀・銅の順に、アメリカ合衆国、日本、カナダと先進国の間での競技となった（表３－２）。

考察

陸上競技では、標準記録を突破していない途上国からの参加が約半数を占めていた。予備予選を導入したことによって、確かにトップレベル選手の負担は軽減されたので適切な判断と言える。短距離の場合は、競技の特性上、黒人選手、とりわけ西アフリカ側の選手に有力な説があるので[12)]、アフリカをはじめとする途上国のからの選手の競技力が向上すると、今後も興味深い競争になることが期待できる。

2008年北京オリンピックでは完全なデジタル化が初めて実施され、世界中でインターネットや携帯電話からの視聴が可能となった[13)]。それゆえに、たとえ予備予選敗退であったとしても、国をアピールするためにはオリンピックに出場するのが一番手近な手段と言える。

サッカーの連盟加盟に対しては、欧州、アフリカ、北中米カリブ海、南米、オセアニアと男女の区分がなされていないが、アジアでは男子のみの加盟があり、その多くはイスラム教を国教としている[14)]。またアジア２次予選のヨルダン戦では、イラン女子代表チームが接触プレーの際に、首が絞まる危険があるヒジャブを着用しているとの理由で、競技参加を剥奪されるなど[15)]、宗教的な制約を受けている。オリンピック憲章では、オリンピズムの根本原則の中で、「スポーツをすることは人権の１つである。すべての個人はいかなる種類の差別もなく、オリンピック精神によりスポーツを行う機会を与えられなければならず、…（以下、略）」とある[16)]。ロンドンオリンピックが残した、今後、解決されるべき課題の１つと言える。しかしそのいっぽうで、初めてカタールから競泳女子50メートル自由形（準決勝）に[17)]、サウジアラビアから柔道78キロ超級（１回戦敗退）に、そしてブルネイから陸上女子400メートル（予選落ち）が、イスラム圏から出場するなど新たな展開も見られた[18)]。

本稿は、単に経済区分とオリンピック参加国との関連について検討をしたもので、オリンピックに参加をした選手のバックグラウンドについては言及していない。今日のオリンピックでは、途上国の選手参加パターンとして、参加選手が自分の国で練習し出場する場合、海外で長年生活をし、母国を知らずしてオリンピックのときのみ国籍を利用して参加する場合、そして国籍そのものを他国にかえて出場するといった３パターンが考えられる。今後、ますます国籍を利用、あるいは変更して出場する選手が増えてくると、途上国からのオリンピック参加状況もロンドンオリンピックとは異なり、メダルを獲得する選手が続出する可能性が出てくる。

まとめにかえて

本稿では、個人種目からは陸上競技100m、集団種目からはサッカーに着目し、そのオリンピック参加状況を分析・検討した。その結果、途上国からのオリンピック参加国・地域は多いが、実際には決勝に進出したり、メダルを獲得するのは難しい状況にあることが明らかとなった。オリンピックの長い歴史からすると、途上国も競技に参加することができる状況にまで時代が変化したことは評価に値する。今後は、途上国であっても、先進国とメダル獲得を競う選手が増えてくることが予測される。

注記および参考文献

1）　ロンドンオリンピックは第30回にあたる。第12回（1940年）は、東京（日本）が返上、代替え地となったヘルシンキ（フィンランド）も第一次世界大戦のため中止となっている。なお、アフリカ大陸での開催は、まだない。

2）「聖火の最終点火者は若手選手７人　ロンドン五輪開会式」朝日新聞デジタル2015. 7. 28　http://www.asahi.com/olympics/news/TKY201207280019.html〈最終アクセス2016年１月３日〉

3）　アラン・フェラン、ジャン＝ルー・シャペレ、ベノワ・スガン（著）、原田宗彦（監訳）『オリンピックマーケティング』スタジオタッククリエイティブ、2013、p22

4） 日本オリンピック委員会『オリンピック憲章』日本オリンピック委員会、2015、p11

5） 経済学の領域では、開発国および開発途上国という呼称が一般的であるが、本稿では「先進国」と「途上国」に統一する。

6） London 2012 Olimpic.org Official website of the Olympic Movement http://www.olympic.org/london-2012-summer-olympics〈最終アクセス2016年 1 月 3 日〉から算出した。

7）「第 30 回オリンピック競技大会日本代表選手選考要項」http://www.jaaf.or.jp/jch/96/2012London.pdf〈最終アクセス2016年 1 月 3 日〉

8）「ロンドンオリンピック（2012年）におけるサッカー競技」https://ja.wikipedia.org/wiki/%E 3 %83%AD%E 3 %83%B 3 %E 3 %83%89%E 3 %83%B 3 %E 3 %82%AA%E 3 %83%AA%E 3 %83%B 3 %E 3 %83%94%E 3 %83%83%E 3 %82%AF_（2012%E 5 %B 9 %B 4 ）_%E 3 %81%AB%E 3 %81% 8 A%E 3 %81%91%E 3 %82% 8 B%E 3 %82%B 5 %E 3 %83%83%E 3 %82%AB%E 3 %83%BC%E 7 %AB%B 6 %E 6 % 8 A%80〈最終アクセス2016年 1 月 3 日〉のデータを利用した。

9） 前掲 4 ）、p12

10） デビット・ミラー（著）、橋本明（訳）『オリンピック革命』ベースボール・マガジン社、1992、p103

11） JICA 研究所『国際協力便覧』国際協力銀行、2007、pp.542−545

12） 中日スポーツ「超人ボルトを生んだジャマイカ、強さの理由は」 http://blog 1 .tokyo-np.co.jp/entertainment/community/2008/08/post_19.html〈最終アクセス2016年 1 月 3 日〉

13） 前掲 3 ）、p22

14） Robert J. Barro, Rachel M. McCleary（2005）'Which Countries Have State Religions?' The Quarterly Journal of Economics, 120（ 4 ）; 1331−1370

15） ヒジャブとは、頭から首を覆うスカーフでイスラム教の伝統に従った保守的な服装である。

「服装の悲劇に泣いたイランのなでしこ」Newsweek 2011年 9 月 7 日 http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2011/09/post-2254.php〈最終アクセス2016年 1 月 3 日〉

16） 前掲 4 ）、p10

17） カタールは、2016年、2020年と夏季五輪招致に立候補しながら、 1 次選考で落選し、

この時点では2024年の招致を目指していたが、結局はロサンゼルス、ハンブルク、パリ、ローマ、ブダペストとなり落選した。

18）　イスラム３カ国から女子代表登場「新時代の幕開けに」朝日新聞デジタル2012. 8. 4 http://www.asahi.com/olympics/news/TKY201208030645.html〈最終アクセス2016年１月３日〉。

―かねだ　えいこ・法学部准教授―